

日本文学史概論

略歴及び著書

明治二九年七月、千葉
県に生まれ、大正九年
七月、東京大学文学部
国文科卒業。
京城大学教授・第一高
等学校長・東京大学教
養学部長・東京大学文
学部長・学習院長をへ
て、現在、日本学士院
会員。
文学博士。
江戸文学と支那文学・
俳趣味の発達・滝沢馬
琴・笑の研究・川柳雑
俳の研究・現代語訳西
鶴全集・奥の細道講読
その他。

日本文学史概論

¥ 980.

昭和42年4月5日 初版発行

昭和51年2月25日 9版発行

著者 © 麻生磯次

発行者 株式会社 明治書院
代表者 三樹彰

印刷所 横山印刷株式会社
代表者 横山弘

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1の16

電話 東京 (294) 5336 (代)

振替 口座 東京 3-4991 番

<検印廃止>

浦野製本

はし が き

日本人は自国の古典にもっと関心をもつべきだと思うが、終戦後はことにそれが軽視されているようである。古典に限らず絵画・彫刻・工芸・建築などにしても、外国人が高く評価すると、急にあわてて見直すというのが、日本人の悪い癖である。

万葉集・源氏物語・芭蕉の名句など、いずれも世界の古典に比べて遜色のないものである。私どもの中学時代には、そういう作品をよく暗誦させられたもので、それが今でも血肉となって記憶に残っている。よい作品をしみじみと味わいながら、古典の展開のあとをたどって見たら、国文学史も興味あるものになるだろうと思う。

国文学史を読んでみたいが、どれもこれもおもしろくなさそうで、ちょっと手にとる気になれない、という声を聞くことがある。今までの国文学史が多くの人たちに縁遠く思われたのは、作品や作者を解説し、それをただ時代順に並べたにすぎなかったからである。国文学史にしても、ただその輪郭だけを平面的に叙述するなら、さほど困難なことではない。しかし読者の興味をつなぐためには、限られた叙述の間に、できるだけ多くの問題と暗示をふくませ、読む人をして考えさせるようなものでなければならぬ。

それから従来の国文学史が無味乾燥と思われたもう一つの理由は、作品の引用が少なかつたためだと思う。本書ではあらゆるジャンルにわたり、できるだけ多くの作品を掲げ、それを地の文の中に融けこませ、両々相俟って理解と鑑賞を深めるようにした。上代から近代に至る作品はおびただしい数にのぼり、長編大作も少なくないので、本書に掲出したのはほんの断章にすぎないが、その作家や作品を説明するに都合のよい一節を選び出すように留意したつもりである。

作品はそれをぼつんと引き離してみるよりも、文学の流れの上にのせてながめた方が、文意を正確にかむことができる。それに本書では味読に便宜するように、引用文には脚注を加え、現代語訳も添えておいた。部分に対する興味が全体への意欲を高めてくれるように念願しているのである。

古典の学習は、はたから強いられただけのものではなく、楽しく読んでゆく間に、いつのまにかそれが身につくというものでなければならぬ。いやいやながら読むのではなく、おもしろく読んで古典に親しみをもち、ことが大切である。こんなことを考えながら筆を執ったのであるが、こうしてできた本書が、一般読書人の味覚にも適し、また大学や短大の一般教養の参考書にもなるならば幸いである。

昭和四十二年二月

麻生 磯次

目次

第一章 上代文学……………五

一 上代の歌謡……………五

二 神話と伝説……………二

三 万葉集……………四

第二章 中古文学……………五

一 平安朝の和歌と歌謡……………六

二 平安朝の物語……………(八)

三 平安朝の日記・随筆……………二六

四 歴史物語と説話文学……………三〇

第三章 中世文学……………三五

一 中世の和歌と連歌……………三五

第四章 近世文学……………一三

二 中世の物語と御伽草子……………一五

三 中世の随筆・日記・紀行……………一六

四 謡曲・狂言及び歌謡……………一四

一 仮名草子と浮世草子……………一三

二 浄瑠璃と歌舞伎……………一七

三 俳諧……………一八

四 川柳と狂歌……………一九

五 国学と和歌……………二〇

六 草双紙と読本……………二三

七 洒落本・人情本・滑稽本……………二三

第五章 近代文学……………三三

一 小 説……………三三

1 開化期の小説……………三三

2 翻訳小説と政治小説……………三六

3 写実小説の萌芽……………三九

4 文芸復興派の小説……………四一

5 観念小説・深刻小説・家庭小説……………四三

6 自然主義の小説……………四六

7 余裕派と耽美派……………四九

8 白樺派と新思潮派……………五一

9 新感覺派以後……………五二

二 戯 曲……………五七

三 短 文 学……………五九

1 詩……………五九

2 短 歌……………六〇

3 俳 句……………六四

付 録……………六三

年 表……………六四

索 引……………六五

第一章 上代文学

一 上代の歌謡

上代人の歌

日本の上代には文字がなかったので、書きしるすことはできなかったが、歌は盛んに作られたのである。上代人にも喜怒哀楽の感情は当然あったはずで、何かのお祝いの場合とか、戦争に勝った場合などには、おおせい集まって踊り狂ったことであろう。その場合に、喜びの言葉が人々の口から盛んに投げ出されたに違いないが、その言葉は舞踊や楽器に合わせるために、だんだん調子が整えられていったものと思われる。

上代人の歌は、胸中にこみあげる情熱を吐き出せばよかったのであって、他の人々の鑑賞を要求したわけではなかった。上代歌謡の特色は、力強く主観を投げ出して歌いあげている点にあるといえよう。

記紀の歌

日本のごく古い歌は、古事記や日本書紀に、二百ほど収められているが、これは大昔の日に数限りもない多くの歌が作られたことであろう。その歌が口から口へ伝えられて、ついに文字にのこされたのが記紀の歌である。伝承の間にさまざまな変化も加えられたであろうし、作者や作歌の事情につい

ても誤伝があるであろうが、とにかくそれは日本詩歌の母胎として、文学史的意義はきわめて大きい。

不定型詩 上代人はさまざまな形体の歌を試みている。上代歌謡の中には、長句や短句が不規則に集められた歌が少なくない。ふぞろいではあるが、一種の律動美は感じられるのであって、

不定型詩ともいふべきものである。

(一) 品陀の 日の御子 大雀 おほささぎ 佩かせる太刀 もとつるぎ 末ふ
ゆ 冬木のすからが下樹の さやさや

これは大和の国巢人が大雀命の佩びておられた太刀を見てよんだ歌であって、意余って言葉が足らぬというような、いかにも上代の歌謡らしい素朴な調子が出ている。しかしこの歌は、歌としての形は整えられていない。語句が集められただけであって、詩美はあまり感じられない。そこで言葉を反復するとか、対になるように語句を配列するという工夫が試みられるようになった。

(一) 浅小竹原 腰なづむ
(二) 虚空は行かず 足よ行くな

日本武尊が伊勢でおかくれになった時、尊は白鳥になって飛んで行

(一) 応神天皇。(二) 仁徳天皇。(三) 太刀の本を吊り佩き。(四) 「ふゆ」は「振ゆ」。鞘の先の方がゆれて。(五) 「素幹」は葉の落ちた木の幹。「下樹」は大きな樹木の下にはえている小さな木。(六) 下樹がこがらしにふかれてさやさやと鳴る意。
〔口訳〕 品陀の帝の皇子様である大雀命が佩びていらつしやる太刀のみごとなことよ。太刀の本を腰に吊り佩き、鞘の先はゆれている。すっかり落葉した樹木の下に生えている細い木の枝が、こがらしにさやさやとゆれているように、大雀の命の大きな腰のあたりに太刀がゆらゆらゆれている。

(一) まばらにはえている笹原。(二) 笹が腰の辺まで茂って行きて悩む。(三) そうかといつて空を飛んでは行かれない。(四) 足で歩いて行くことよ。「よ」は「より」「から」の意。「な」は感動の助詞。

かれた。妃やお子たちはそのあとを追って行ったが、腰のあたりが藪にひっかかつて思うように進めない。そこでこの歌ができたということだ

〔口訳〕 笹が腰の辺まではえていて歩きにくい。そうかといって空を飛んで行くわけにもゆかず、足で歩いて行くことだ。

ある。この歌は「浅小竹原 腰なづむ」という句と、「虚空は行かず 足よ行くな」という句が対になっていて、前の歌よりも形が多少整っている。日本の詩歌は、まずこのような不定型詩や偶数形式の歌に出發したとみてよいであろう。

奇数句形式の歌 しかし語句をくり返すだけでは、ややもすると單調に流れる。そこで二句を反復した上

(一) をとめの 床の辺に

わが置きし 劍の太刀

其の太刀はや

(一) みやずひめを指す。(二) 草薙劍をさす。

(三) 感動の助詞。

〔口訳〕 尾張の宮酢媛の床の辺に置いてきたあの草薙劍よ。あああの劍のことが忘れられない。

これは日本武尊がなくなれる前に、尾張の宮酢媛の枕もとに置いてきた草薙劍を思い出してよまれた歌である。この歌も「をとめの 床の辺に」の句と、「わが置きし 劍の太刀」とが対になっているのであるが、それだけでは十分氣持ちをあらわすことができない。そこで「その太刀はや」という句を支えの句として添え、奇数句形式の歌にしたのである。支えの句を添えたために、歌に落着きができ、いきいきとしてきたのである。

片歌

このように句数を奇数にしたことは、詩歌形式の大きな進歩であった。この形式の最も単純なものは片歌である。

(一) はしけやし 吾家の方よ

(三) 雲居たち来も

これは日本武尊が病氣にかかれた時に、故郷をなつかしく思つて作

られた歌であるが、この片歌はあまり短すぎて、落着きもなく、気持ちも十分いいあらわせない。そこで片歌を二度くりかえす形式の歌が作られた。これを旋頭歌という。

(二) から国を いかによ事ぞ

(三) 目頼子来たる

(四) むかさくる 壱岐の渡を

目頼子来たる

継体天皇の御代に、目頼子という者が、任那駐在の將軍毛野を召還するため、壱岐のあたりへ行つた時、任那にいる毛野の部下の者がよんだ歌である。この旋頭歌は声をあげて歌うには調子がよいのであるが、本来これは二単位の歌であるから焦点が二つに分かれて、短歌などに比べるとなんとなくしまりが足りない。

(一)「はしけやし」は「愛し」に同じ。「愛し」はよいといふ意。「やし」は「よし」と同じで感動の助詞。(二)「よ」は「より」の古形。(三)「雲居」は雲のある所の意であるが、転じて雲のことをいう。

(一)韓国。朝鮮。(二)「如何に言ふことぞ」。韓国をどんな国だといつて目頼子は来るであらう。(三)継体天皇の時代の人。歌では「珍しい」をふくめている。(四)向離く。はるか向こうに離れる意。

〔口訳〕この韓国に向かってどういうわけか知らないが、目頼子がやって来る。海原はるかかの壱岐の海路を、目頼子が珍しくやって来る。

短歌

短歌はいうまでもなく、日本詩歌の代表的な詩形である。神武天皇（きさきいすけよりひめ）の後の伊須氣余理比売のお作に、こういう歌が伝えられている。

（一）（うみな）
狭井川よ

雲立ちわたり

（二）（うみな）
畝火山

木の葉騒ぎぬ

風吹かむとす

神武天皇の崩御の後、その庶兄が帝位を奪おうとして軍兵を集めたのを、後の伊須氣余理比売がそれを察知して、歌に諷したのである。

この歌も対の句を二つ並べて、それに支えの句を添えたもので、前にあげた「をとめの 床の辺に」と同じ形になっている。上代歌謡の歌体はさまざまであるが、有力なのはやはりこの短歌の形式であった。

五七調

この「狭井川よ」の歌は五七五七七の五句三十一音の歌で、この形式は後世まで残り、今でも和歌といえたい短歌をさすことになっている。ただ後世の歌が多くは五七五、

七七の調子になっているのに、これは五七、五七、七の調子である。例えば、「敷島（しきしま）の やまと心を 人

問はば 朝日ににほふ 山桜花」の歌は、意味の上からいっても、また調子の上からいっても「敷島の

やまと心を 人間はば」（五七五）で切れ、それを「朝日ににほふ 山桜花」（七七）で受けている。ところが

「狭井川よ」の歌は、意味や調子の上からいって、「狭井川よ 雲立ちわたり 畝火山」（五七五）、「木

の葉騒ぎぬ 風吹かむとす」（七七）というようにはなっていない。「狭井川よ 雲立ちわたり」（五七）で

（一）大和の三輪山より発して、經向川に合流する「よ」は「より」の古語。（二）大和の高市郡にある。大和三山の一。（三）「さやぐ」は「さわぐ」。

（四）歌 狭井川の辺から黒雲がおこり、畝火山には木の葉がざわざわさいわいしている。大風が吹いてきそうだ、油断がならない。

切れ、「畝火山 木の葉騒ぎぬ」で切れ、「風吹かむとす」(七)を添えた形になっている。つまり、五七の句を二度くり返し、それに七の支えの句を添えているのである。こういう調子を五七調というのであるが、昔の歌は五七調であった。五七調は上が軽くて下が重い調子である。基礎のしっかりした建物のようなもので、なんとなく落着きがあり、どっしりした重みがある。その調子を二度くり返して、さらに七音の支えの句を添えるのであるから、いっそう安定感をますわけである。こういう重厚な調べが、上代人の好みに合ったのである。

長 歌

短歌は五七を二度くり返して、七を添える形であるが、五七を三度以上くり返して、七を添える形の歌を長歌という。これは上代ではたいへん栄えたが、しかしこの長歌も五七を長くくり返すだけであるから、どうしても単調にならざるをえない。そこでこれもだんだん飽きられて、平安朝以後になると、ほとんど作られなくなり、短歌だけが残ることになったのである。

上代人の 今では和歌といえ、短歌をさすことになっているが、昔は以上述べたように、短い歌や苦 心 長い歌や、さまざまな形の歌が作られたのである。一句のふくむ音数も長いのもあれば、

短いものもあるというように、ひどくふぞろいであった。句と句の組合せも、「浅小竹原 腰なづむ」(六五)というように、長短と続くものや、「やまとは 国のまほろば」(四七)というように、短長と続くものなどがあつて、一定しなかった。

昔の人々はいろいろな試みをした結果、一句の音数は、五音と七音が最も日本人の耳に適していること

を発見した。句と句の組合せも、五七と短から長へ続くのが、一番落着きがあることを知った。そして五七を二度くり返し、七を添える短歌の形が、和歌の理想的な形としてだんだん勢力を得てきたのである。昔の歌には、さまざまな形がある。上代人はいろいろな試みをしているのであって、理想的な歌の形を作るために、昔の人々がどんなに苦心したかが想像できるような気がする。

二 神話と伝説

古事記 神話や伝説は、世界のたいていの国には伝わっているが、日本にも神々を中心にした物語の成立や、英雄佳人の伝説がたくさん残っている。古事記はそれを文字に書きうつした最も古い本である。

古事記は元明天皇の和銅五年（七三三）に完成したのであるが、その準備作業はすでに天武天皇の御代になされていた。天武天皇崩御後、元明天皇はその御遺志を継承し、和銅四年九月十八日おのおのやすまろ太安万侶に編纂を命ぜられた。そこで安万侶は稗田阿礼ひえだのあれの暗誦する言葉を、漢字で書きしるして、翌年の正月二十八日に献したのである。

古事記の内容 古事記は三巻から成っている。上巻は皇室の祖先の系譜を中心にした神話を、体系的にまとめたものであり、中巻・下巻には、神武天皇から推古天皇までの出来事が、皇位継承の

順序に従って述べられている。神話はまず天地創造のことからはじまる。あらためて掲げてみよう。

(一) 天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神、此の三柱の神は、並独神成り坐して、身を隠したまひき。次に国稚く、浮脂の如くして、くらげなすただよへる時に、葦牙の如く、萌え騰る物に困りて、成りませる神の名は、宇麻志阿斯訶備比古遲神、次に天之常立神。此の二柱の神も独神成り坐して、身を隠したまひき。

古事記はこのように天地の成りはじめの事から説いている。宇宙の創始の際に、天上にまず現われたのは天之御中主神であった。これは宇宙の中央にあつて、あらゆるものを支配し給う神である。これとならんで天地の生成をつかさどる高御産巢日神と神産巢日神とが現われた。現われたといつても、幽冥界におられたのであつて現世には姿を現わさなかつた。そのころは国土はまだ固まらず、水の上に浮かんだ脂のようなものであつて、海月のようにふわふわとただよっていた。そのぶよぶよしたもののなかから、水辺の葦の芽のように、天に向かつてまっすぐに立ち上るものがあつたが、それは、やがて宇麻志阿斯訶備比古遲神になり、

初めの一節を仮名まじりの文に

(一) 宇宙のできはじめの時。(二) 人の住む地上に對して、神の住む天上をいう。「原」は野原、海原、腹のハラと同じく、すべて広い所をいう。(三) 「成る」は「生じる」の意味。「まず」は尊敬。「る」は完了。(四) 「御中」は真中で、「主」は「の大人」のつまつた形で、支配する意味。宇宙の中央にある主宰神。(五) 「産巢」は「吾むす」のムスと同じく生成する意。「日」は靈妙なものをあらわす語。「高御」ははめたたえる言葉。宇宙の生成をつかさどる創造神。(六) 「柱」は神を数える言葉。(七) 男神女神と並んだ神ではなく単独にある神をいう。(八) 現世に姿を現わさなかつた神であるという意。(九) 「国」は国土。「稚く」はまだ成りとのわぬさま。(一〇) 脂を水面に垂らしたように、ふわふわしているさま。(一一) くらげは海に浮かんでいる海月である。「なす」は「似す」と同源の語で、如くかの意。(一二) 葦の芽。「牙」は芽の意。(一三) 「宇麻志」ははめたたえる語。「阿斯訶備比古遲」は葦牙。「比古」は男子の美称。「遲」は雷・父・男などの「ち」で、美称の接尾語。(一四) 「常」は常磐で永遠の義。天にあって永遠に

さらに天之常立神あめのとこたちのかみとなつた。

これを支配する神をいう。

古事記には、かように次々に神々が現われて、天地が創造されてゆく過程が物語られているのである。

古事記の 古事記は国家や皇室に関する神話や伝説が中心をなしているが、その間に数々の優美な物文芸性 語が挿入されている。その可憐かれんな物語は、国家を背景にする英雄的な物語と交錯すること

によって、快適な律動の変化を見せており、古事記の文芸的価値を高めているのである。

古事記に現われる英雄的人物は、一方では主意的男性的活動的な強い性格をもっていると同時に、他方では主情的人間的女性的な優美な心情をもっている場合が少なくない。例えば須佐之男命すさのおのみことの物語にしても、八岐大蛇やまたのおろちを退治することによって、その英雄性が強く發揮されているが、一方では「八雲立つ」の歌物語によって、情趣の世界がくりひろげられている。

彼(い)な(に)り 避追はえて、出雲の国の肥河上なる鳥髪(ひ)の(か)みの地に降りましき。此の時しも
箸其の河より流れ下りき。於是須佐之男命、其の河上に人有りけりと以為し
て、尋覓(い)ま(し)めぎ上り往でまししかば、老夫と老母と二人在りて、童女を中に置多
て泣くなり。爾ち「汝等は誰ぞ」と問ひ賜へば、其の老夫「僕は国ツ神大山
津見ノ神の子なり。僕が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比売
と謂す」と答言す。亦「汝が哭く由は何ぞ」と問ひたまへば、「我が女は本
より八稚女在りき。是に高老の八俣遠呂智(や)を(と)めなも、年毎に来て喫ふなる。今

(一)「かかれば」「かるが故に」または「故に」の意の接続詞。(二)逐れて。追放されて。(三)斐伊川。船通山から発して穴道湖にそそぐ。(四)船通山の麓の地をいう。(五)「まぐ」は求め、たずねる意。(六)老女はオミナで、若い女はヨミナである。オは大、ヲは小の意。(七)「私は国ツ神で、大山津見神の子である」という意。高天原にある神を天ツ神といい、国土にある神を国ツ神という。「大山津見神」は、山をつかさどる神。(八)日本書紀に、老

其来ぬ可き時なるが故に泣く」と答白言す。「其の形は如何さまにか」と問ひたまへば、「彼が目は赤加賀智如して、身一つに頭八つ尾八つ有り。亦其の身に羅及櫓、相生ひ、其の長さ谿八谷峽八尾を度りて、其の腹を見れば、悉に常血爛れたり」と答白す。

爾速須佐之男命其の老夫に、「是汝の女ならば、吾に奉らむや」と詔りたまふに、「恐れれど御名を覚らず」と答白せば、「吾は天照大御神の伊呂勢なり。故今天より降り坐しつ」と答詔へたまひき。爾に足名椎、手名椎神、「然坐さば恐し、立奉らむ」と白しき。爾速須佐之男命乃ち其の童女を湯津爪櫓に取り成して、御美豆良に刺さして、其の足名椎、手名椎神に告りたまはく、「汝等八塩折の酒を醸み、且垣を作り廻し、其の垣に八つの門を作り、門毎に八つの佐受岐を結び、其の佐受岐毎に酒船を置きて、船毎に其の八塩折の酒を盛りて待ちてよ」とのりたまひき。故告りたまへる隨にして、如此設け備へて待つ時に、其の八俣遠呂智信に言ひしが如來つ。乃ち船毎に己が頭を垂入れて、其の酒を飲みき。於是飲み酔ひて留り伏し寝たり。爾速須佐之男命其の御佩かせる十拳剣を抜きて、其の蛇を切り散りたまへば、肥河血に變りて流れき。故其の中の尾を切りたまふ時、御刀の刃毀けき。怪しと思はして、御刀の前以ちて刺し割きて見そなはししかば、都牟刈の大刀

翁と老婆が少女をなでさすつて泣いていたとある。「足名」「手名」というのは、足をなで、手をなでる意味であろう。「づち」ははめたたえる言葉。(九日本書紀には「奇稻田媛」とある。「奇」は美称。「稻田」は仁多郡横田町の稻田という地名と関係がある。(二)和名抄に、出雲国神門郡古志郷とある。今の錦川郡古志村及び布智村にあたる。(三)日本書紀に、「八岐大蛇」とある。頭も尾も八つある大蛇である。(四)赤い醜態。(五)日本書紀には、「八丘八谷」とある。長くつらなる山と谷。(六)血がじくじくとにじんでいる。「あゆ」は、血や汗のようなものにしたたる意。(七)「伊呂」は、親愛の意をあらわす接頭語。「勢」は、女から男を親しんでよぶ語。ここは、同母の弟の義。(八)「湯津」は五百箇で、数の多い意。「爪櫓」は爪形の櫓の意であろう。上代の櫓の形は縦に長かった。(九)少女の姿のままでは大蛇に呑まれるおそれがあるので、爪櫓に変化させたのである。(一〇)上代の男子の頭髪の結び方。「ミヅラ」は耳連の義で、髪を頭の中央で左右にわけ、耳のところでたばねて垂れるのである。(一一)「シホ」は「入」などのように、物を染める時、染汁にひたす度数を数える語である。「折」はくり返す意。幾度もくり返して飲した強い酒。(一二)「かもす」の古語。(一三)